

日本ブロンテ協会関西支部

2021年大会プログラム

日時:2021年3月19日(金)～ 23日(火)

実施方法:オンライン大会(オンデマンド式)

※オンライン上に発表者の原稿(動画・音声等)を公開

開会挨拶

支部長挨拶:奥村 真紀(日本ブロンテ協会関西支部支部長・京都教育大学准教授)

会長挨拶:橋本 清一(日本ブロンテ協会会長・青山学院大学名誉教授)

顧問挨拶:内田 能嗣(日本ブロンテ協会顧問・帝塚山学院大学名誉教授)

研究発表

詩の奏でる音楽——アン・ブロンテの詩の響き

後中 陽子
(近畿大学非常勤講師)

『13番目の物語』とブロンテ姉妹の小説

小田 夕香理
(富山大学専任講師)

ブランウェルの作品における男性像

——1827年から1833年までの作品を中心に——

瀧川 宏樹
(大阪工業大学特任講師)

総会

日本ブロンテ協会関西支部事務局

〒535-8585 大阪市旭区大宮5-16-1

大阪工業大学 工学部総合人間学系教室 瀧川宏樹研究室内

TEL: 06-6167-5191

bronte.kansai@gmail.com

参加方法

下記のGoogle Formsにて参加の申し込みをお願いいたします。

https://docs.google.com/forms/d/e/1FAIpQLSdsolIZN4bXv6llmLlvblx9EsvOiooH1VbhSgOjwG9WkPyoBg/viewform?usp=sf_link（日本ブロンテ協会HP新着情報にも、リンクをUP）

上記のGoogle Formsにご登録いただいたe-mailアドレスに、発表原稿等を掲載しているリンクをお送りいたしますので、そちらから閲覧可能です。

質疑応答の受付期間は19日～21日までになります。Google Formsにて事務局が質問を回収し、さらに各発表者からの応答を回収した上で、22日以降にオンライン上にUPいたします。

総会に関しては、大会開催期間中にオンラインもしくは（上記のGoogle Formsにご登録いただいた）e-mailを通じて総会資料を配布し、所定の方法で賛否をお答えいただきます。

研究発表要旨

1. 詩の奏でる音楽——アン・ブロンテの詩の響き

後中 陽子（近畿大学非常勤講師）

Bob Duckettが「ブロンテ家のすべての子どもたちは、作家であり芸術家であるのと同様に、音楽家——力量のある博識な音楽家である」と述べるように、ブロンテ家は皆が音楽に高い関心をもっている。アン・ブロンテ（Anne Brontë, 1820-49）もまた、音楽を愛するブロンテ家の一人である。アンは、父に買い与えられたスタンド型コテージ・ピアノを少女の頃から師について習い、歌うことを好み、生涯音楽との関わりを持ち続けた。アンの詩にリズムとメロディがあることは、Edward Chithamはじめ、多くの批評家が認めるところである。本発表では、詩のテキストを分析することで、アンがいかに詩のリズムや音の響きに心を配っていたかを考察する。主として、アンの詩に音楽をつけたもつとも近年のアダプテーション作品を鑑賞するとともに、彼女の詩にみる音楽的な魅力を再確認したい。

2. 『13番目の物語』とブロンテ姉妹の小説

小田 夕香理（富山大学専任講師）

ダイアン・セッターフィールド（Diane Setterfield, 1964-）の『13番目の物語』（*The Thirteenth Tale*, 2006）には、エミリー・ブロンテ（Emily Brontë, 1818-48）の『嵐が丘』（*Wuthering Heights*, 1847）とシャーロット・ブロンテ（Charlotte Brontë, 1816-55）の『ジェイン・エア』（*Jane Eyre*, 1847）の要素が緻密に張りめぐらされている。19世紀の文学を好むヒロインのマーガレットはこれら二作品の愛読者であり、また、「孤児」や「幽霊」、「失踪」、そして「家庭教師」や「狂女」など、ブロンテ姉妹の小説に特徴的な要素が巧みに用いられている。さらに、キャサリンとヒースクリフの関係を思わせる、二人の人間のあいだの密接な関係とその喪失は、ヒロインを含む複数の登場人物によって経験され、この作品の中心的なテーマとなっている。本発表では、『13番目の物語』におけるブロンテ姉妹の小説の要素のあり方を分析し、それらの要素によって何が実現されているのか考えてみたい。

3. ブランウェルの作品における男性像

—1827年から1833年までの作品を中心に—

瀧川 宏樹(大阪工業大学特任講師)

近年ブランウェル・ブロンテ(Branwell Brontë, 1817-1848)の作品への着目が徐々になされ始めている。これまでのブロンテ研究において、女性の生き様に関しては様々な観点から読み解かれてきた。一方で、男性優位社会にあったからこそ、社会的落伍者としてのブランウェルの生き様は、容赦なく長年批判に晒されてきた。ところが、男性には男性なりの苦悩があったはずであり、近年のジェンダー研究の分野では、男性性という視点からの考察も盛んである。失敗者として位置付けられることとなったブランウェルの声を拾い上げることにより、ヴィクトリア朝の中産階級の男性のこれまで見過ごされてきた側面を浮き彫りにできるのではないか。本発表では、その一環として、ノイフェルト(Victor A. Neufeldt)版全集第1巻を中心に、散文および詩作品を含めたブランウェルの作品における男性像の変遷を追う。